

事務局長を担当しての雑感

夫 附 野 崎 田

昨年秋、鳴子の大会で中大が事務局をひきうけてから、早くも今年の大会がめぐつてきた。島崎が総括事務、委員会運営を、私が会計その他を分担してきた。事務局は年四回の通信発行、会費徴収、委員会開催、大会の準備・発表者の接渉、それに年報の編集まで加わつて、結構仕事にことかくことはなかつた。そして最後に経費を危ぶみながらも、大分変更になつてゐる会員名簿を再刊した。そのため事務局用名簿を今後の操作を考へて帳簿式からカード式に改めた。そしてこれに関連して会員の分布状況を検討し、今後の村研究発展のため思いつゝ私見を述べてみたい。

会員数は九月末現在一八七名で府県別分布は図のごとくである。(一二頁参照)以前に、通信二〇号にのせられた五六年一〇月の会員状況では、北海道三四、東北二一、關東六三、中部二四、近畿二三、中国四一〇、九州二四、外地二、計二〇一名であつた。その減少の原因は詳でないが、地区でみるとくに北海道、九州で減つてゐるところから、大会参加の困難がその一因かもしれない。

またこの図だけで見ると、本州中部部と四国が会員数が少い感じがする。もちろん大都市では勤務先と居住地が別々の県になつてゐることもあるし、会員が自分の県内だけを前

究してゐるわけではないから、それがどうと
いうわけではない。ましてこれは数だけの現象で研究の質は考へてゐないからなおさらのことである。(たとへば会員の法、経、社、民、地、史の専攻別からも検討したかつたができなかった。次の名簿作成のときはこれも示してもらえば有難いと思ふ。)

もちろん本会は村落研究への関心によつて主体的に参加した会員をもつて構成されてゐるのであるから、会員の地域や専攻による偏りは策を以て強いるべきものでないかもしれないが、なおこの特色をそこなない限度において若干の努力を会員相互の間でやつてみたらどうかと考へた次第である。

というのは、全国的に会員網が充実することによつて(専攻別のそれも平行して)村研として組織的な共同研究ができるであらうと思ふからである。中央の都市在住の村落研究のベテランが東奔西走して全国的な村落研究をするのもよいが、どうしてもベテランといへども対象地の数や精練において妥当を欠きやすい。この欠を補う点に村研の組織網の強みがでてくるであらう。村研が、たんにベテランが研究した成果を披露しあうとか、また研究をやり始めたばかりの者がそれを吸収するといった性格から一歩すすめて、「村研自体が研究そのものを遂行する」ということをもその任としてよいのではなからうか。たしかにそのためには、しつかりした組織網と同じくしつかりした中心的推進者団が必要であ

り、そのためにはなおかなりの時日を要するかもしれない。

しかし、さしあつて次のようなことはある程度可能かもしれない。たとへば、地域別のモノグラフの組織的な定期的目録化、何県の何村の部落がいつどんなテーマで調査されるかの報告は何という雑誌のどこにのせられてゐるかということの、地域的分布が全国的に総観できるようにしたい。これによつてどの地方の村落の研究が比較的未着手であるかまたどの角度からの研究が空白であるかがわかり、新しく研究する者の対象や問題の設定が効果的となるし、とくにその近辺在住の会員が共同して研究することができるであらう。また、全国各地域の村落を、同一の課題と項目によつて比較構造的な研究が可能とされる。はじめは簡単な項目によるものであつても、とにかく全国的規模の共同研究が期待できるであらう。このようにして、官庁統計では把握しえない村落の様相が、しかも断片的でない有効な資料として明かにされるであらう。

数字としては示さなかつたが、会費納入状況すら匂はくしない当会としては、夢のたわごとにしかならないかもしれないが、しかし当会の発展如何は、たんに会費だけの間題でもないような気がして、事務局を担当してゐるうちに感じたことを述べた次第である。